

基地が建設されてから訴えても遅い！

(0.01μW/cm²)でも通信可能という研究もあり、出力をもっと抑えられるはずだ」と言う。

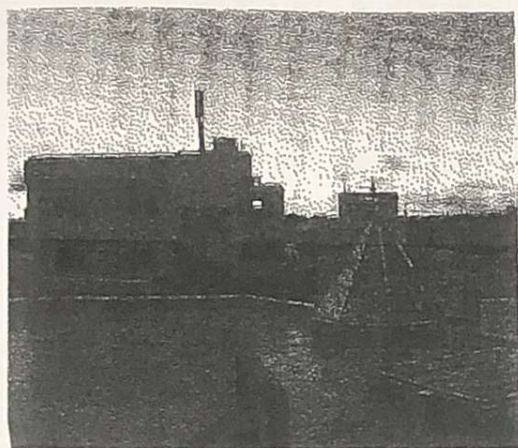
保育園の屋上にはプールがあったが、園内でも数値が高かったため撤去して地上に移した。また、基地局に面した窓に電磁波を遮蔽するシールドフィルムを貼るなどの工事をして屋内の電磁波は削減できた。しかし、庭で遊ばせると鼻血が出るので、西藤さんらは園庭の対策に頭を悩ませている。

西藤園長は、「これは私たちだけの問題ではない。電磁波の危険性を広く知ってもらうことが大切だ」と話している。

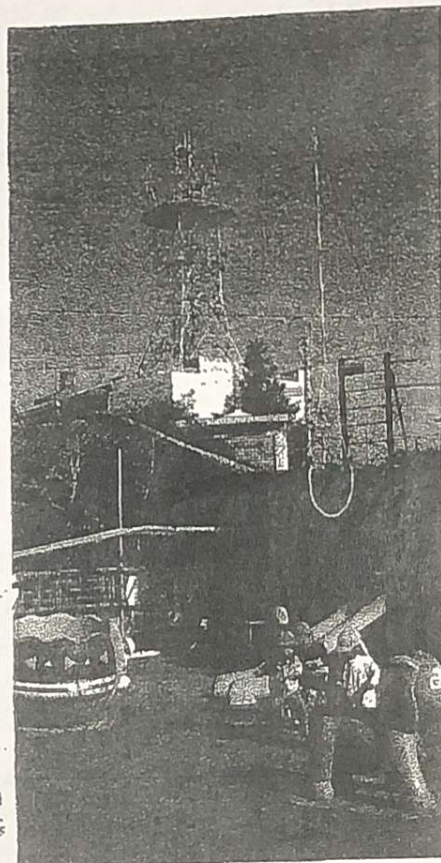
「肩を痛がる」園児たち

昨年11月、九州大学が中心となり、電磁波過敏症(EHS)の治療に取り組む医師を含む研究チームが発足し、前述の朋保育園も対象に疫学調査が行なわれた。専門家による携帯電話基地局周辺の疫学調査は日本初で、子どもへの影響に焦点を当てた調査は世界的にも珍しい。

宮崎県と鹿児島県の七つの保育園と幼稚園でアンケートを実施し、今年6月の日本臨床環境医学会で中間報告が発表された。調査したのは、子どもの健康状態と保育園や自宅の環境(携帯電話基地局との距離や電波を発生させる機器の



日本初の疫学調査でわかった電磁波の影響



朋保育園から見えるドコモ基地局(右)とKDDI基地局(左)。(撮影/筆者)

携帯電話や無線LANなど無線通信が増え続けている。病院院内でも使用規制の緩和が進む。しかし日本初の本格的な疫学調査で、基地局周辺の保育園などに通う子どもが電磁波の影響で体調不良を起こしていることが明らかになった。

加藤やすこ

使用状況、化学物質の曝露などで、349票の回答があった。中間報告では4〜5歳児の有効回答148票の分析を発表。このうち自宅が基地局から300メートル未満なのは20人、300メートル以上が46人、不明が82人だった。自宅が基地局から300メートル未満の園児は「ふらふらする」「胸が苦しいという」などの症状が統計学的に有意に多かった。とくに顕著なのは「肩などを痛がる」で、300メートル以上の園児のオッズ比(ある因子との関連性を示す指標。数値が大きいほど関連性が強い)は6.2倍、「夜中に目を覚ます」は3.0倍だった。この研究チームでは0〜3歳児のグループやほかの要因に関する分析も進め、来年度中に論文を発表する予定だ。

調査にかかわった国立病院機構盛岡病院の副院長で、化学物質過敏症・環境アレルギー外来を担当する医師、水城まさみさんは「化学物質過敏症(CS)患者の30〜40%は電磁波にも反応するようだ。柔軟剤の香料が原因でCSを発症し、基地局周辺で見られる症状を訴える子どももいる。原因を把握するには、携帯電話やゲーム機器の使用状況を含め、お子さんの行動や症状を記録してくれるとたいへん役立つ」という。

軍事レーダーの電磁波出力は携帯基地局の3万倍！

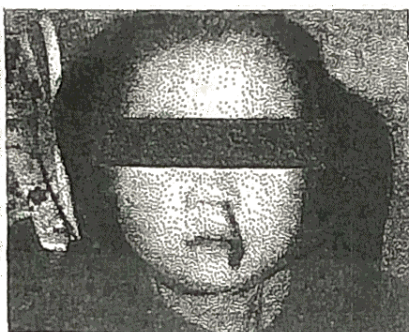
宮崎県小林市の朋保育園（西藤勝信園長）で2年前から、突然、大量の鼻血を出す子どもが増えた。そこで副園長の西藤由紀子さんは昨年6月から「鼻血表」を作り、園内や自宅で鼻血を出した子どもの記録をつけはじめた。表によると6月は76人中延べ13人が鼻血を出し、7月は18人。運動会の練習が増えた8月は24人、運動会のあった9月は35人だった。園児の数は3〜5歳児が39人、外遊びのない0〜2歳児が37人。

西藤さんは「鼻血を出すのはほとんどが3〜5歳児で、1日に何度も出したり、30分止まらない子どもいた」という。表を作ることによって、雨などで子どもを園庭に出さない日は鼻血が出ないこともわかった。同園は給食に可能な限り、無添加、無農薬、国産食材を使うなどこだわっており、環境問題にも関心があった西藤さんは「鼻血の原因は6年前に約56メートル先のビル屋上に設置されたKDDI基地局ではないか」と考え、昨年6月、同社に測定を依頼。地権者にもアンテナ撤去の相談をした。保育園から約120メートル先にはNTTドコモ基地局もある。昨年7月、近隣の幼稚園にも呼びかけ、基地局を撤去移設するようドコモとKDDIに要望書を送った。

沖縄県那覇市でもKDDI基地

宮崎県小林市の朋保育園で観察された鼻血は突然発生する。「自宅周辺にも基地局があり、被曝時間が長い子どもに鼻血が多いようだ」と西藤勝信園長。（撮影／筆者、提供／朋保育園）

局が設置されたマンションで鼻血や頭痛等の症状が増えたが、撤去後は大幅に減少したことが、新城哲治医師の調査でわかっていく。ドコモは携帯電話基地局から発

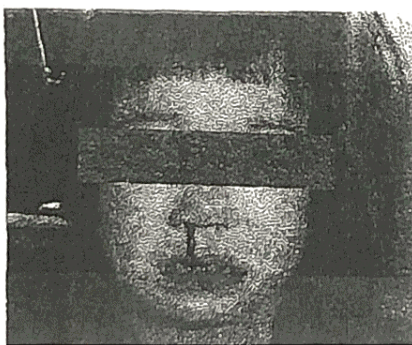


携帯電話の基地局周辺で子どもに大量の鼻血！

生ずる電波は「老若男女を問わず十分ご安心いただける」として、撤去移設には応じられないと回答。KDDIも要望には応じないと答え、地権者からも契約を中途解約したいという相談があったが拒否したことも知らせてきた。

「正常値」の約17万倍

KDDIは昨年7月に測定を行ない、基地局が設置されたビル屋上で電力密度（一定の面積を通過するエネルギーの量を示す単位）は0.045μW/cm²、保育園玄関



前で0.017μW/cm²と報告してきた。

西藤さんは、九州大学日本エジプト科学技術連携センター教授で電磁波理論が専門の吉富邦明さんに相談。同年9月に吉富さんが測定すると、保育園の屋上で最大値が17.6μW/cm²、園庭中央で8.52μW/cm²、玄関前で2.34μW/cm²という値が出た。最新の文献に基づいて電磁波に関する健康問題の診断・治療ガイドラインをまとめたオーストラリア医師会が、最大値が0.0001μW/cm²以下なら「正常値」としているの、屋上は約17万倍も高い。

KDDIとの測定結果が違う原因として吉富さんは、次のように説明する。

「デジタル波は100万分の1秒単位で制御され、瞬間的に平均値の100倍くらいの電波を出す。私は刻々と変わる信号（電波）を一定時間測定して最大値と平均値を出しているが、KDDIが使う測定器・スペクトラムアナライザは瞬間的なピーク（最大値）を測定できず、激しく変動する信号の測定には向いていない」

しかも「このKDDI基地局の出力は60Wと通常の2倍以上で、測定された電波のほとんどがKDDIから発生していた。屋上では17.6μW/cm²もあったが、0.1